

1つのボールが人生を変える
A ball can change the world

第2回

ダイバーシティカップ報告書



Diversity Cup
2016.7.30
in MIFA Football park

Diversity Cup
2016.7.30
in MIFA Football park

● 主催 ●

スポーツフォーソーシャルインクルージョン実行委員会
認定NPO法人ビッグイシュー基金

●目次●

はじめに	3
サッカーをしながら、ダイバーシティについて考えた:蛭間芳樹	4
大会概要・試合結果報告	6
参加チーム紹介	8
プログラム内容	10
ダイバーシティカップの運営で大切にしたこと	
アイスブレイクの様子	
交流会の様子	
大会のアルバム・参加者の声	16
参加チームからのレポート	
1 FDAチャレンジ	22
結果以前に、1つ1つのチャレンジに意味がある～FDAチャレンジの挑戦	
2 FC茗荷谷	24
自分の世界を広げるきっかけとしてのサッカー	
3 千葉『共に暮らす』フットボール協会【トモフト】	26
障害の有無ではなく、好きなこと「サッカー」を軸にした人との出会い	
4 FYO	28
多様な参加の形。楽しいからはじめよう!	
5 FCさぼうと	30
勝ち負けだけじゃない、仲間とつながるサッカーの形を知った	
6 野武士JAPANと愉快な仲間たちinTOKYO	32
ゴールの喜び・敗北の悔しさをこれからのチーム作り、自分自身の生活へ	
7 文化学習蹴球団	36
仲間と楽しさ・嬉しさを共有する、新しいフットサルの形	
8 フェアスタートと愉快な仲間たち	38
大会を通して再会した仲間とともに、純粋にサッカーを楽しめた	
9 ピースポート・ピースボールプロジェクト	40
船の旅とサッカーがつくるダイバーシティ社会	
10 グレイス・ロード	42
ギャンブル依存症からの回復を目指す「グレイス・ロード」	
11 TEAM SHOSHIN MONO(ちいむ小忍者)	44
強い人と戦うこと、自分の世界を一步出ること、2つの挑戦	
12 野武士・大阪	46
本当に困っている人達にこそ、スポーツの場が必要	
もしかしたらダイバーシティカップはそんな場になっているのかも	
13 good!	48
チームメイトの意外な一面を知った、記憶に残る大会	
14 オムハビユナイテッド	50
社会からの「ラベル」を「個性」にするきっかけとしてのダイバーシティカップ	
アンケート結果報告	52
収支報告	53
おわりに(みんなが居心地のよい社会にむけて):鈴木直文	54

はじめに

ビッグイシューでは2004年よりホームレスサッカーチームを応援してきました。チーム名は「野武士ジャパン」。野武士とは特定の主人に仕えない武士のことを指します。最初練習を始めたころは、「おい、シュートさせろ」「お前、思うように動かねえな」と強面の顔で話しかけられ、チーム名である野武士ジャパンらしい・・・とドキドキしたものでした。でもサッカーを続ける中で、味方とパスが繋がりチームの得点を喜び、負けたら悔しがり「今度こそ点を決めたい!勝ちたい!」という声がかえってきました。中には、50代でホームレス状態から脱し、60歳を過ぎた今も、建築現場で働きながらサッカーの練習に欠かさずに来るメンバーもいます。そして、そうしたチームメイトの姿に刺激を受ける人が大勢います。「なんで、ホームレスがサッカーを?そんな暇があれば仕事を探すのが先だろ」そういった言葉を頂くこともありますが、住居や仕事に加えて希望も失った彼らにとって、もしかすると、サッカーは人とのつながりや生きる意欲を取り戻すきっかけになっているのかもしれません。

今回のダイバーシティカップでは、「ホームレス」の人だけでなく、難民、ひきこもり、発達障害、うつ病、ギャンブル依存症、被災者、社会的養護、生活保護受給者など、「社会から排除されがちな人」と呼ばれる人が207名集まりサッカーを通じて交流をしました。コートの上では、すべての

人が立場や背景を超えて純粋にボールを追いかける姿がありました。過去にあった苦しい思い出、未来を考えると不安になる気持ちは、誰しもがもっているものだと思います。でも、今を楽しみ、楽しかった時間と人との出会いが明日につながる、そんな時間がダイバーシティカップではつくれたように思います。

この報告書では、ダイバーシティカップに参加した方の感想と合わせて、未来に向かうそれぞれの人生が凝縮されています。報告書には「サッカーをしながら、ダイバーシティについて考えた」を野武士ジャパンのコーチの蛭間芳樹さん、「みんなが居心地のよい社会にむけて」を一橋大学准教授の鈴木直文さんに寄稿頂きました。大会の様子や参加者の声と合わせて楽しみながらお読み頂ければ幸いです。

最後になりましたが、この大会を開催することができたのは、クラウドファンディング(レディフォー)で応援下さった91名、チャリティ大会の参加者46名、大会ボランティア47名、ビッグイシュー基金の応援会員・寄付者など多くのみなさまのおかげです。心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

認定NPO法人ビッグイシュー基金
ダイバーシティカップコーディネーター
長谷川 知広



寄稿 サッカーをしながら、ダイバーシティについて考えた

野武士ジャパンコーチ 蛭間芳樹 (ひるまよしき)

軸を変えることでコミュニティが変わる

私がホームレスサッカー日本代表？チーム「野武士ジャパン」の練習にコーチとして参加するようになり7年が経ちました。いま「野武士ジャパン」の練習には、ホームレスの方だけではなく、生活困窮者、うつ病などの若者や支援者、近所のおじさん等々様々な人が参加しています。

最近の練習ではアイスブレイクの時間を意識的に入れることにしています。というのも、野武士ジャパンの練習に参加するメンバーは、日常生活で世間の目を気にしている人が多いので、「サッカーやります」と言っても不安を抱えています。まずは心の緊張をほぐす必要があります。

コーチ陣それぞれの創意工夫でメニューを考えていますが、たとえば私がよくやるのは、笛を吹いて「靴の色が同じ人は集まれ〜！」「血液型同じ人は集まれ〜！」「出身の都道府県が同じ人は集まれ〜！」と声をかけて、グループをつくってもらいます。この過程で、「青い靴〜！」「B型〜！集まってください！」「青森〜っ！」など声を出してリーダーシップを発揮する人もいます。一方で声を自分から出さないものの仲間の

集まりに向かう人もいます。

「靴の色が同じ人は集まれ〜！」という投げかけは、一つの軸の提示ですので、グループに分かれてもそれはただの属性で、グループ間に優劣はありません。ただ、軸を変えるとコミュニティが変わる、マジョリティやマイノリティが変わることが往々にしてあるんです。

そもそも、社会には多様な軸や視点があるはずなんです。私たちは、それを学歴や年収や大企業やらといういくつかの軸でしか捉えることができていません。その前提を変えてみると、色々なシナリオが見えてくるはずです。

練習に参加している人たちは、いつも「ホームレス」や「精神疾患」という集団名詞で、ある種マイノリティや社会的弱者として区別されているのですが、実は違う軸や視点でとらえると違ったチーム分けや意味付けができます。違うところにも仲間がいるということに気がついてほしいと思っています。

ルールチェンジすることの大切さ

このようなアイスブレイクは練習のはじまりに行っていることですが、最近試合にも工夫をしています。「ゲームのルールを変える」というものです。競技性をベースとしたサッカーやフットサルですと、足の速い人や経験者が活躍できるかもしれません。では「走るのは禁止して歩く」のをルールにしたらどうでしょうか？ 目隠しをしてみたら？ パスしかできないとしたら？ といった具合に、ルール自体を変えると活躍する人が変わってきます。



私が意識しているのは、ゲームのルール・チェンジをすることの大切さです。前提とされているルール自体を疑い、それを変えるとどんな変化がそのシステムに起きるのかを体感してほしいのです。

社会も同じような性質があると思います。「あの人は優秀だ」「あの企業はハイパフォーマンスだ」と思ってきたものは、あくまで社会のルールに上手に適應している人や組織だと思います。もちろん当人の努力もあります。

私は7年ほどホームレスサッカーの現場に関わっていますが、周辺から「なぜ、ホームレスの人たちがサッカーをするの？」と何千回と聞かれたことでしょう。ホームレスの人たちはサッカーをしてはいけないんですかね……。といいますか、マイノリティの人たちは、やること全てに説明が求められる気がします。

個の多様性とその包摂へ

マイノリティは、生きづらい社会のルールで生活しないといけない現状があります。作家の星野智幸さんと話したとき「誰もがなんらかのマイノリティや弱さをもっているはず。それを隠して、無理に普通の顔をして道を歩いている」と仰っていました。自分自身のマイノリティを前面に出した途端、急に社会的に不利、困難な立場になってしまいますので、それを隠すことばかりうまくなっていきます。いまだに高度経済成長時代に確立された価値観や社会の軸がある種、絶対的な存在となっていますし、義務教育や就職活動はその典型かもしれません。

大人になったら結婚して、女性は専業主婦で、男性は社畜となり働いて……と、他人と同じであること、空気を読むことが「良い」という価値観。

同質性を求め何か違うと出る杭は打たれる社会から抜け出すことが必要ではないでしょうか。みんな違うからこそ価値がある、それぞれの生き方自体に選択肢があると認めていく社会の方が、豊かで強いはずです。そして、日本は産業も地方も多様性に溢れています。

ダイバーシティカップに参加するようなメンバーも、一般と言われる人も、みんながそれぞれのマイノリティ性や弱さを認めた上で、各々の

違いを認めながら共通の目標や目的に向かうことができれば、すごく素敵ですよ。

いまの野武士ジャパンやダイバーシティカップの活動は、未来を見失った路頭に迷う日本社会に「個の多様性」の大切さを気づかせるケースになりえると思うのです。サッカーボールを蹴りながら、そんなことを考えています。

ということで、みなさん一緒にサッカーしませんか。



●プロフィール

蛭間芳樹 (ひるまよしき)

1983年、埼玉県生まれ。2009年よりホームレスワールドカップ日本代表「野武士ジャパン」コーチ、2015年よりビッグイシュー基金理事をボランティアで務める。2009年(株)日本政策投資銀行入行、現在BCM格付主幹(企業の防災対策、危機管理経営を評価し、取り組み状況に応じて金利などを変更する金融商品)。専門は社会政策学、金融、サッカー。内閣府「事業継続ガイドライン第3版」委員をはじめ政府関係、民間、大学の公職多数。世界経済フォーラム ヤング・グローバル・リーダー 2015選出(日本人最年少)。

大会概要・試合結果報告

開催日時 2016年7月30日(土)
 場 所 MIFA Football park
 参加チーム数 15チーム(207名)
 総試合数 43試合
 ボランティア 47名、応援・観戦99名
 総参加者数 約350名

●トーナメント戦結果

ダイバーシティ杯 優勝 ピースポート・ピースボールプロジェクト
 準優勝 FC茗荷谷



●トーナメント戦結果

ビッグ杯 優勝 FYO
 準優勝 FDAチャレンジ



●トーナメント戦結果

ワンダフル杯 優勝 グレイス・ロード
 準優勝 野武士JAPANと愉快的仲間たちin TOKYO

ワンダフルカップ				
	野武士JAPANと 愉快的仲間たち in TOKYO	野武士・大阪	グレイス・ロード	順 位
野武士JAPANと 愉快的仲間たち in TOKYO		3-0	1-3	第2位
野武士・大阪	0-3		0-2	第3位
グレイス・ロード	3-1	2-0		第1位

参加チーム紹介 ※当日の大会配布資料より抜粋

Aリーグ

(1) 野武士JAPANと愉快的仲間たちin TOKYO

東京のビッグイシュー販売者、ボランティアを中心に構成されたチームです。近所のおじちゃんであるボランティアさんの大阪チームへの移籍、韓国からのスペシャルゲストによる大型補強など、いつも愉快的話題満載の我がチーム。ピッチの外では、今日も絶対にボールを蹴らない勝利の女神が見守ってくれていることでしょう。思いっきり楽しみたいと思います!

(2) ピースボート・ピースボールプロジェクト

1983年に設立された国際NGO。地球一周をはじめとする「国際交流の船旅」を企画し、これまでに5万人を超える参加者が参加。国連の特別協議資格を取得し、国際協力、交流、検証を続けながら世界中の人々の声を国際社会に反映させてゆく活動を行う。サッカーをテーマに国際協力を行う「ピースボールプロジェクト」では、これまでに44カ国に12,500個のボールを届け、現地でサッカー交流を展開。「昨年に続き、本大会でもサッカーを通してたくさんのお出合いがあることを願っています。」▼ピースボート <http://peaceboat.org/home.html>

(3) 文化学習蹴球団

NPO文化学習協同ネットワークが運営する居場所に集う若者たちで結成されたチームです。月に1回、練習で汗を流しています。今日は勝負にこだわらずに楽しく「ハットトリックより記憶に残るプレーを!」の精神で、試合終了まで走りぬけます!

(4) FC荻荷谷

荻荷谷クラブはひきこもりや発達障害、精神疾患など、生きづらさを抱える20～40代の方を対象に、1985年から「居場所」活動を中心に、社会参加に向けての土台作りをお手伝いしています。FC荻荷谷は、荻荷谷クラブから2011年に発足したサッカー・フットサル部です。現在ではビギナーレベルのフットサル大会を中心に、ほぼ当事者のみで活動しています。控えめな私達ですが、今回の大会を楽しむことを通じて、何かの一步が踏み出せたり、自分自身の変化や、世界の広がりを感じられたらと思います。

(5) インシャッター

国内にいるシリア人と日本人との混成チームです。人種や国籍、世界観などの枠を飛び越え、試合をするたびに戦術面での相互理解を深め、中盤を厚くした早いパス回しで優勝を狙います。また、ほかのチームとの交流も楽しみにしており、全力で最大限の敬意を持って各チームを撃破していきます。
と、大会への意気込みを語っていますが、すべては「インシャッター(神のみぞ知る)」です。人智を超えた予測不能な川の氾濫や洪水を繰り返し、新しい文化は生まれていくのです。

(6) フェアスタートと愉快的仲間たち

児童養護施設出身者をはじめとし、親を頼らずに10代から自立就職をした社会人達で100%構成された「フェアスタートと愉快的仲間たち」身寄りがないというのはハンデではなく、実は現代社会を強く生き抜くために必要なことを多く教えてくれます。昨年のダイバーシティカップで優勝を飾り、今大会も優勝候補として大注目の「フェアスタートと愉快的仲間たち」親を頼らずに1人で生き抜く漢(おとこ)達の雄姿に今大会もご期待ください!!

(7) FYO

私たちは福島県内で活動する3団体(NPO法人ビーンズふくしま・NPO法人しんせい・任意団体四つ葉学舎)の合同チームです。それぞれフリースクールの運営や若者支援、被災者支援や障害者の仕事づくり、若者の学び場創り等を取組んでいます。前回に引き続き二度目の大会参加になりますが、メンバーの半分は大会初参加、多少の緊張もありますが一丸となって楽しくボールを蹴りたいと思います。今回のチーム目標は、チーム内外のメンバーと仲良くなること!ぜひ「FYOメンバー」に気軽に声がけ頂ければ嬉しいです(^^)♪

Bリーグ

(8) 千葉「共に暮らす」フットボール協会【トモフト】

私達は誰でも気軽に楽しく生かされる社会をフットボールを通して実現しようと考えております。そのためには様々な精神的な枠を超えた対話が必要だと常日頃思っております。フットボールやお食事会を通して一緒にエンジョイさせて下さい。沢山の方と楽しみを共有させて頂ける機会を楽しみに待っております。よろしくお願いします。

(9) good!

good!は若者のきっかけ作りを応援するNPO法人です。元気な学生はもちろん、不登校・ひきこもり経験者を含む全ての若者たちがアジアや国内の様々な地域で井戸掘りや農作業などを行うボランティア・ワークキャンプという活動を行っています。今日はワークキャンプを通して出会った仲間たちが集まりました。キャンプで培ったチームワークを生かして頑張ります!どうぞ、よろしくお願いします。

(10) 野武士・大阪

ホームレスワールドカップ日本代表「野武士ジャパン」の大阪チームです。「ビッグイシュー日本版」の現役の販売者に加え、販売を卒業された方や自立支援療養の出身者などのメンバーが集まっています。毎月、練習や交流試合を実施し、大勢の参加者とともに楽しく、賑やかに活動しています。フットサル経験者は多くないですが、大阪から駆け付けたボランティアメンバーと一緒に「目指せ1勝」を合言葉に、大会に臨みます。どうぞよろしくお願いします!

Bリーグ

(11) TEAM SHOSHIN MONO(ちいむ小心者)

私たち「チーム小心者」は、認定NPO法人育て上げネットから来ました。育て上げネットは、「Vision:すべての若者が社会的に所属し「働く」と「働き続ける」を実現できる社会」、「Mission:若者と社会をつなぐ」を理念とし、若者達が自立する社会を目指している団体です。今年度もジョブトレストップ、ジョブトレ現役生・卒業生を含めたメンバーで大会に臨みます。参加するメンバーひとりひとりには普段は大それたことなどできない小心者ですが、今年度こそ、このチームで勝ちに行きます!!

(12) オムハビユナイテッド

私たちOmhabi United(オムハビユナイテッド)はうつ病等の精神疾患の当事者で構成されたチームです。精神疾患の再発予防・社会復帰支援サービスの利用者とOBOGが主なメンバーです。フットサルを楽しみながら、社会復帰に向けた体力づくりや、復帰後も悩みや気づきを共有しあい、自分らしい生き方を見つけるきっかけになることを目的としています。昨年の大会に出場し他チームと交流したことをきっかけに、最近では他の精神疾患当事者のチームと合同練習する等活動の輪を広げています。また新たな仲間やチームとの交流を深めていけたらと思っています。

(13) FDAチャレンジ

私たちFDAは川崎市市内を中心に、障がいのある方・引きこもり・生活保護受給者など、働きづらさを抱える方々の外出するきっかけ作りから就労支援、就労後の定着支援まで一貫して行っています。病気で仕事を休職・退職してしまった、不登校やいじめにあった経験などで自信が持てないなど壁にぶつかった多様な背景をもった人が利用しているのが特徴です。さまざまなことにチャレンジしたいという利用者の思いを胸に、今年も参加させていただきます。

(14) FCさぼうと

外国にルーツを持つ若者たちとボランティア講師のチームです。試合も応援も、ぶっつきり優勝を目指します!

(15) グレイス・ロード

山梨県にあるギャンブル依存症からの回復施設です。スポーツマンシップにのっとり、皆さまと親睦を深めたいと考えています。

Cリーグ

プログラム内容

●ダイバーシティカップの運営で大切にしたこと

ーリラックスして、楽しんで、お互い認め合って、チャレンジ！
ーチャレンジしきれなかったこと、試合で出し切れなかったことも次への糧に！
ー運営サイドも混ざる！

※運営しようとしている人がそのことについて知っていなかったらそれは偽物。
参加者、スタッフ、運営側、みんな同じようにダイバーシティの価値観や体験を共有！



●フットサル大会

◇アイスブレイク

試合開始前に心身の緊張をほぐすためにウォーミングアップ兼アイスブレイクを実施しました。

- ①走りながら、肩をぐるぐる回す(F1)
[意図] リラックス: 体をほぐしながら、心もほぐす。
- ②握手して自己紹介(F2)
[意図] リラックス+お互いのことを認識する。
握手をして自分の名前を言うことで、自分が阻害された人間ではない、自分を出していい場だと感じる、お互いを認め合う。
- ③ジャンプしてハイトッチ(F3)
[意図] お互いを認識+ちょこっとチャレンジ
お互いのタイミングを合わせることで、通じ合う感覚を無意識に共有する。
お互いに少し気を使わないとうまくいかない！
- ④鬼ごっこ(F4)
[意図] お互いを認識+ちょこっとチャレンジ
体を動かしながら単純なゲームで楽しむ。
- ⑤鬼ごっこ(肩を持って前後になって)(F5)
[意図] お互いを認識+ちょこっとチャレンジ
④のときによりも少し行動が制御されることで運動能力が平均化される。
ゲーム性が増し平等にみんな楽しめる。
二人で息を合わせないといけないから難しさがあるが、うまくいくと楽しい。

◇試合

- ・チームごとのレベル差が大きくなり過ぎないように試合時間を短く(7分)、自由交代としました。
- ・試合方式は5チームによるリーグ戦を行い、上位2位の計6チームによるダイバーシティ杯、3・4位によるビッグ杯、5位によるワンダフル杯を競いました。

●交流会

フットサル場に隣接するカフェをお借りし試合後に食事会を行いました。
食事会後は、飲み物を飲みながら5人1グループで下記のテーマでテーブルトークをしました。

- ①自己紹介(K1)
- ②サッカーをするきっかけ・大会参加のきっかけ(K2)
- ③今日のサッカーで良かったところ(K3)
- ④もっとサッカーを楽しむには(K4)
- ⑤サッカー以外でもこれからチャレンジしたいこと(K5)
- ⑥テーブルごとに話した内容を全体共有(K6)

プログラム内容

●アイスブレイクの様子

F1 走りながら、肩をぐるぐる回す



F2 握手して自己紹介



F3 ジャンプしてハイタッチ



F4 鬼ごっこ



F5 鬼ごっこ(肩を持って前後になって)



●交流会の様子

K1 自己紹介



K2 サッカーをするきっかけ・大会参加のきっかけ



K4 もっとサッカーを楽しむには



K5 サッカー以外でもこれからチャレンジしたいこと

K6 テーブルごとに話した内容を全体共有

K3 今日のサッカーで良かったところ



大会のアルバム・参加者の声



すばらしい大会でした。フットサルは初めてでしたがチームにも一体感が生まれ参加して非常に良かったです。各地区大会をやりたい。もっとお祭りっぽくやりたいです。前回できたつながりがお互いに残っていたことで、大会趣旨をより体感できました。【FYO】



楽しかったのもっと多くの人たちに参加してほしいです。一般のお客さんがもっと参加(観戦でも)できる大会にしたい。身内やコミュニティ内だけで終わらせるにはもったいないイベントだと思います。【野武士・東京】



大会のアルバム・参加者の声



若い人のチームがたくさんあって良かったです。もっとも他のチームの人たちのことを知りたかったです。
【インジャーラー】



「つながり」「仲間」「チーム」という言葉を多く聞くことができました。「他人」なんていないんだと心から思いました。
【ピースポート・ピースボールプロジェクト】



色々なバックグラウンドをもった人々との交流ということでしたが、フットサルをしているとそんなことは関係なく、みんな勝ちたいという気持ちでおもいっきり走って良かったと思いました！ 関東中心ですが、関西、中国、四国、九州でもリーグ等をした。A ball can change the life! A ball can bond our relationship! 【野武士・大阪】



様々な背景の人が集まるコトの楽しさを実感！ 大会運営など、何か一緒にできたらうれしいです。【トモフ】



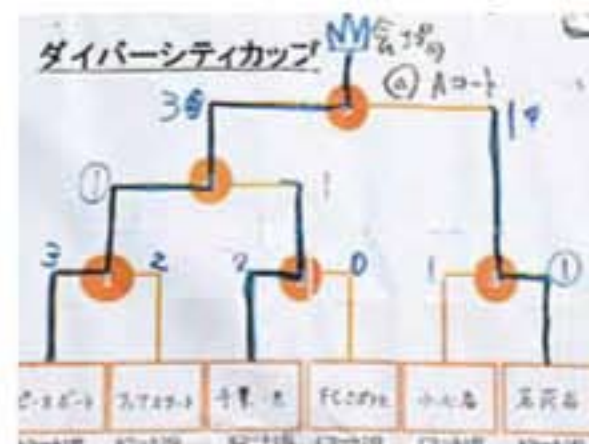
大会のアルバム・参加者の声



スポーツをきっかけに人が笑顔になり人がつながり、スポーツの力を改めて感じました。また、人それぞれに抱えているもの、訴えたいものがあるんだと実感しました。【good!】



会場に来るまで、いろんなイメージがあったが、立場やその他様々などなくプレーでき、気持ちよかった。交流会の時に「サッカーコートに横にステージをつくら、サッカーだけでなく音楽とかダンスとかやったら…」という意見が出て、それだったらもっといろんな人が楽しめそうだなと思いました。【茗荷谷クラブ】



前回より競技志向の方が多く感じたけれども、前回同様負けても満足感を得ることができる素晴らしい大会でした。



相手をまさにリスペクトしていて本当にいい大会。相手を褒めあったり、点をとったときに喜んでくれた。素敵でした。



結果以前に、1つ1つのチャレンジに意味がある～FDAチャレンジの挑戦～

障がいのある方・引きこもり・生活保護受給者など社会で働きづらさを抱える方々の外出するきっかけづくりから就労支援、定着支援を行うNPO法人FDA。ダイバーシティカップには、様々なことにチーム一丸でチャレンジしたいという想いで「FDAチャレンジ」というチーム名で参加。大会に参加したメンバーの背景や大会の感想をチームリーダーの成瀬さんに聞きました。

休みの日の過ごし方が日常をより良いものに

—まず、FDAの活動内容を教えてください。

私たちFDAは川崎市内を中心に、障がいのある方・引きこもり・生活保護受給者など、働きづらさを抱える方々の外出するきっかけ作りから就労支援、就労後の定着支援まで一貫して行っています。病気で仕事を休職・退職してしまった、不登校やいじめにあった経験などで自信が持てないなど壁にぶつかった多様な背景をもった人が利用しているのが特徴です。

—今回の大会に参加した理由はどのようなものだったのでしょうか。

土日を楽しく過ごすことは当たり前のよう

考えられていますが、就労支援の観点で見た時に見過ごされがちな視点で、前回大会の報告書でもこの点をお伝えしてもらいました。平日ジョブトレーニングで仕事に向けての準備を頑張っている人でも、休みの日を上手に過ごせず孤独感を抱えているメンバーもいるんです。

そこで私たちの団体では、土曜日に、かき氷や納涼祭、様々なアクティビティを実施しています。「ダイバーシティカップ」は普段スポーツをする機会が少ないメンバーにとって体を動かし他団体の人と交流する場になったらよいのでは、という思いから2年連続で参加させてもらいました。

—メンバー集めはどのようにしたのでしょうか。

前回大会に参加したメンバーの多くは、幸いなことに卒業し次の就労先で頑張っている者も多くいます。そのため、今大会には、事業所の趣旨を説明し興味を持ったメンバーで参加させてもらいました。年齢的には10代～40代、背景的なことを言いますと、私自身も網膜色素変性症で目がほぼ見えません。他には、知的障害、統合失調症、癲癇、心臓病など、本当にいろんな背景を持ったメンバーです。ここに、ダイバーシティカップの事務局から助っ人プレーヤーを2人加えてもらい試合をしました。



朝の集合からチャレンジ

—大会はどうでしたか。

まず、会場が遠いので川崎駅の集合時間が8時だったんです。普段のジョブトレーニングが朝10時スタートであることや体調に不安を抱えるメンバーが多いことを考えると、ここからが私たちにとってはチャレンジでした。「みんな無事に集まれるかな」「天気は大丈夫かな」そんな心配もありましたが、無事に集まることができ、試合前に1つのチャレンジを成功できたわけです。

会場では、試合前のアイスブレイクがあって、知らない人と挨拶をしたり、ハイタッチをしたり、追いかけっこをしたり、普段とは違う環境、違うメンバーでの交流でした。緊張していたメンバーも多かったのですが、「●●県出身の人集まって～」「靴の色似ている人で座って～」など、共通する点を探す遊びを交えてのアイスブレイクが楽しかったですね。

これらのチャレンジを終えて、ようやく試合になるわけですが、いくつかの試合に勝つことができました。勝てたことはもちろん嬉しいのですが、私たちにとって一番うれしかったのは、チームのメンバー全員がコートに立って試合を楽しめたことです。勝負事なので勝ちたいという想いは当然ありますが、身体が動く人だけ、うまい人だけがプレーすればよいのではなく、みんなハンは抱えつつもコートに立ってプレーをする、そのことを大切にしたいです。その結果として勝つこともできました。それはすごく大きな自信になりました。うちのメン



バーで鳥という女性がいるのですが、彼女1点決めました。本人は「嬉しいけれど、ほんとにかと思った!」と言っていました。それは彼女が会場に足を運び、コートに立ちゴール前にいたからこそできたことなんです。結果だけでなく、そうした1つ1つのチャレンジに意味があると思っています。

—「ダイバーシティカップ」で今後チャレンジしたいことはありますか。

ダイバーシティカップにはいろんな人が参加しているので、点数や勝ち負け以外にも表彰をするという「ダイバーシティカップ」ならではの評価軸があっても面白いと思います。応援を頑張っている人。ファッションが面白い人。等々…

でも、個人的に一番してみたいことは、FDAを利用しているメンバーの家族に来てもらうことです。メンバーはみんな事業所の中でジョブトレーニングを頑張っているんです。そして、ご家族はそのメンバーを家から見送って応援してくれている。だから、仕事もそうだけどサッカーや様々な場面で頑張っているみんなの表情を見てもらいたい、そんな風に思っています。

自分の世界を広げるきっかけとしてのサッカー

ひきこもりや発達障害など、生きづらさを抱える20～40代の方を対象に、社会参加に向けての土台作りとして1985年から“居場所”作りを中心に活動する茗荷谷クラブ。3年ほど前にフットサルチーム“FC茗荷谷”が発足し、定期的に大会にも出場しています。今大会は初出場ながら堂々の準優勝！参加者のお二人にお話を聞きました。

負けても下を向かない大会

—ダイバーシティカップのことを聞いたときの印象は？

(Aさん)初対面の方と交流することは、僕にとってそれなりにハードルのあることだったのですが、みんなで参加する形であれば楽しいかな、気づきがあるかなと思って参加しようと思いました。知らない場に行くことに不安もあったのですが、チームメンバーに出欠をとったところ予想以上に参加者が集まりました。

(Bさん)自分たちのチームは、2ヵ月に1回くらい初心者向けの「Do！シロート」という大会には出ているのですが、ダイバーシティカップの「サッカーを通じて他者と知り合おう」という趣旨も新鮮味があって良い経験になるかなと思って出ようと思いました。

—大会はどうでしたか。

(Aさん)普段出ている大会では、みんな勝つことや優勝を狙っているんですが、そこでは味わえないような雰囲気がありました。他のチームを応援しつつも、みんなサッカーを楽しんで優勝を目指しているような、盛り上がりを感じました。最初はやっぱり緊張していたのですが、試合前にアイスブレイクがあったので、そこで気持ちがだいぶほぐれました。

(Bさん)雰囲気が良かったです。サッカーは

勝負事なので大会の判定でギスギスすることもありますよね(笑)でも、この大会では負けているチームでも下を向かずに頑張っていたし、応援もすごく声が出ていてよかったと思いました。勝ち負けにこだわるよりも、交流の要素が大きい大会なのだなと感じました。

自分から一歩外に出て世界を広げる

—大会を通して、他のチームとの交流はありましたか。

(Aさん)交流会全体を通して、前向きな話が多かったのが印象的でした。good!の方は学校に行きながらgood!に通っていたり、「サッカー以外にがんばりたいこと」というテーマで話をした時に、みんな明確にやりたことを言っていて、そういうビジョンを持つことってすごいことだなと刺激を受けました。

(Bさん)自分はうつ病を患っている方と話して、その人は大会について「ミックスゲームでやるよりも交流ができるのではないかな」という意見を言っていて、ポジティブに物事を考えているなと思いました。あとはピースポートの方が「これから世界一周行きます！」って言っていて、みんな事情は異なるけれど、これからに向けて前向きでした。僕はどちらかというと、自分から広げていくのが苦手なので刺激的でした。



—FC茗荷谷として今後の目標はありますか。

(Aさん)チームとしての目標は立てていないのですが、プレー自体を楽しめればいいかなと思っています。自分はパスがたくさんつながってゴールを決められた時に喜びを感じられることが多くて、チームメンバー1人ひとりが楽しんだ上で結果がついてくればいいかなと思います。

あと、交流会に出て思ったのは、今までは自分の与えられた範囲の中で人間関係とか、行動範囲とかその中で生活をしていたんですが、good!さんとか他のチームの人の話を聞いて、これまで自分が足を踏み入れてないところにも、自分が思えば行くことができるのだなって感じました。そこまで大きなことができるかわかりませんが、少しずつ自分の世界を広げられたら

いいなと思っていました。

(Bさん)チームとして良い成績を残したいのですが、長期的な目標はなくて、2、3ヵ月先の大会に向けて、やっぱり楽しむっていうのがいいと思っています。競技志向になり過ぎてしまうと、初心者や一歩踏み出したい人が入りにくくなってしまうので、「FC茗荷谷」としては楽しむってことは譲れないことかもしれません。あとは、A君の言うように、僕も人間関係をあまり広げないタイプだったんですが、交流会でいろんな人と話して楽しかったんですよね。今までは、ちょっと苦手な人とは距離を保っていたりしていたけど、一歩踏み出すきっかけになったかもしれないです。

障がいの有無ではなく、好きなこと“サッカー”を軸にした人との出会い

千葉県内で、精神障がい者や引きこもり、不登校者などを対象にフットボールを通じた支援活動をしている、千葉『共に暮らす』フットボール協会。ダイバーシティカップに参加した3名のメンバーに感想を聞きました。

当事者・支援者の垣根を超えたフットボール

―ダイバーシティカップに参加した経緯について教えてください。

(山田さん)第1回ダイバーシティカップに参加した「オムハビユナイテッド」のメンバーに大会のことを紹介してもらいました。自分たちのチームは、千葉『共に暮らす』フットボール協会【以下：トモフト】といって、うつ病などの精神疾患の当事者チームであるオムハビユナイテッドとは、精神障がい者のフットサル大会で交流したことがあったんです。ダイバーシティカップの話を聞いたときに、トモフトと目指していることが近い！と感じました。どんな人たちと出会えるのだろうとワクワクした気持ちで参加を決めました。

―「トモフト」はどんなチームなのでしょう。

(佐々さん)もともとは千葉県内に精神障がいのフットサル大会があり、そこにチーム参加や運営といった形で関わっていたのですが、精神障がいをもった人同士の交流だけでなく、フットサルを通じてより多くの人と交流できたらと立ちあがった団体です。今年は「オープンリーグ交流会2016」というものを開催し、精神障がいの有無にかかわらず100名ほどの人が参加し、ミックスチームを作ってチーム名や目標を決めてゲームをして交流するといった場を開催しました。

(山田さん)僕自身、以前統合失調症を患っていて、ほとんど歩けない状態だった時期があるんです。でも、デイケアの施設でフットサルのプログラムを紹介してもらい、身体を動かし、人と関わる中で、心身の健康を取り戻していきました。今は、毎週フットサルをしていてトモフトの運営や

一般の人や当事者どなたも参加できる練習会を開催しています。トモフトには、自分のように当事者から支援者になった人や、医療者や若者支援の人など自由な感じでやっているのが特徴です。

―ダイバーシティカップに参加してみてどうでしたか。

(降屋さん)本当に楽しかったです！トモフトが主催してきた精神障がい者大会では大人しい方が多いんです。大会としてはちょっと静かすぎるかなと。そもそも精神保健福祉の分野は支援者自体がシャイで人付き合いが苦手な方が多いんですよね(笑)ダイバーシティカップはそれぞれのチームに特徴があって、また、そこに関わる方達もとても明るい方が多くて言葉の通り多様な人と出会えて楽しかったです。

(佐々さん)自分は精神科の医師をしているので、仕事柄、精神障がい者への偏見といったものを社会の中で感じる事が多くあります。でも、ダイバーシティカップに来ているチームの背景を見てみると似た構図があるなと感じました。そして背景は違ってもなぜかフットボールがそこにあって楽しんでいる。その縁で今回さまざまな背景を持ちながらつながることができて、フットボールの偉大さを実感しました。また、今まで自分は「精神障がいと社会」といった考えでしたが、もっと幅広く「何らかの理由で生きづらさを感じている人と社会」について考えないとなーと思いました。個人的には、最後のゲームでキーパーと1対1だったんですけど、シュートを外しちゃって…その感覚やシーンって鮮明に覚えていています。本当に悔しいです。

(山田さん)ええ、佐々さんの最後のシュートシーンが、僕の脳裏にも残っています(笑)

(降屋さん)僕は交流会のあとのミックスゲームにも参加して、誰が誰かが分からない状態でボールを蹴ったのですが、チーム対抗戦とは違った楽しさがありました。30分ノンストップでボールを蹴って2得点1アシスト。翌日から3日間

筋肉痛で本当に厳しかったです(笑)みんな自然な感じで打ち解けていました。ゲームの後、連絡先を交換した文化学習蹴球団さんは、同じ総武線沿線で私が本業で関わっている「サポートステーション事業」を受託しているという共通点がありました。横のつながりも大切にしたいので今度は総武線カップなどしたいですね。

(山田さん)すごく楽しかったです。フットサルをする時は病気がとか関係ないし、あれだけフットサルを一緒に楽しめたら、フットサルを超えて、仕事することだったり、他の様々なことをみんなで共有し、新しい社会を創造できそうです。

楽しいことで自然と動ける

―今後の「トモフト」の目標は。

(降屋さん)僕は大会や交流会だけでなく、日常的に出張フットサルっていうのをやりたいと思っています。自分自身フットサルをやることで人生がいきいきしてきた経験があります。もしデイケア施設等で人数が集まってい



ないところがあれば、精神障がいを抱えた当事者プレイヤーを派遣、場合によってはコーチ役を務めてもらったりする事で、フットサルができる環境や当事者がチャレンジできる可能性も広げていきたいです。

(佐々さん)最初来た時は全く喋らなかった人でも、今ではチームを仕切っていたり、人間って変化するんだということを実感しています。そういう一つの場としてサッカーを使いたいですね。あと、みんながサッカーできるわけではないので、例えば音楽やデザインとか、一緒に混じって、音楽部とか美術部とか、いろんなパートが集まったらおもしろいですよね。障がいの有無じゃなくて、好きなことを軸にしていろんな人が入っていくコミュニティができたら良いなと思っています。

(山田さん)楽しい場を作りたいですね。楽しいと頑張らなくても自然と動けるということを実体験として持っているの、そういう場をいろんな人に体験して欲しいです。

多様な参加の形。楽しいからはじめよう！

福島県で活動をする3つの団体から結成されたFYO。フリースクールの運営や若者支援、被災者や障がい者の仕事づくり、学びの場づくりにチャレンジしている。ダイバーシティカップには、団体やスタッフと利用者という垣根を超えて参加。チームリーダーのりょうさん、メンバーのなっちさんに大会に参加しての感想を聞きました。

大会への参加の形も多様！

—大会参加までの経緯を教えてください。

(りょうさん)第1回のダイバーシティカップに参加して楽しかったので、また参加できればと思い3つの団体(ビーンズふくしま、しんせい、四つ葉学舎)に声をかけました。真面目な話になってしまうのですが、若者支援の現場にいると団体の代表者同士は知り合いでも、スタッフや利用者間の交流って思うほど多くないんです。でも、みんな熱い想いを持っているし、似た境遇の中頑張っている。そうした1人ひとりが繋がっていくことって生きていくうえでとても大切なことだと思っていたんです。ダイバーシティカップは、そうした体験を小難しく議論するのではなく、サッカーというツールを使って楽しくできるので面白いなと思いました。

(なっちさん)私は昨年の大会に友人が参加して

いて、話を聞いてなんとなく面白そうと思っていました。今年はその友人とりょうさんから誘われて、運動不足だったし、新しいことや場にもチャレンジしたいと思っていたので参加してみることにしました。でも、私含めて、運動不足の人が多かったので3回ほど集まって大会に向けて練習をして大会には臨みました。

—FYOは、オリジナルTシャツや横断幕、鳴らし物もあって印象的でした。

(りょうさん)ダイバーシティカップは日本語にすると「多様性」という意味だと思うのですが、大会への参加の形も「多様」にできたら良いなと思いました。自分たちのチームはTシャツを作ったのですが、シャツに刺繍をミシンで縫っているんです。それは、双葉八町村から避難している方が作ってくれました。他にも、練習中に怪我をしたメンバーがいて、横断幕にメッセージを書いてくれたり、みんながみんな元気でフットサルをできるわけではないので、体調的に大会に参加できない人でも大会に参加するプロセスを一緒に楽しめたらと思いました。

—大会でチームとして大事にしていたことがあるそうですが。

(りょうさん)チームのコンセプトとしては、「勝つことだけにこだわらず楽しみたい」と思っていたんです。でも、試合となるとやっぱり勝ちにこだわってしまいますね(笑)

(なっちさん)私も負けず嫌いなのでもっと勝ちたかったです。大会自体は楽しかったんですけど、もっと動けるになりたいし、交流会でもっと他のチームの人と喋りたかったと思っています。ちょっと悔しかったですね。

—チーム内のコミュニケーションはどうでしたか。

(なっちさん)最初はチームのメンバーも半分くらいは知らない人だったのですが、練習をする中で徐々に打ち解けていきました。大会当日は、助っ人プレーヤーの田中さんが加わってくれたのですが、内心では緊張していました。私5年くらい引きこもっていた時期があって、同世代の男性ということで緊張してしまっていました。でも、そういうのは克服していきたいし、以前は引きこもりの経験を隠したかったんですけど、今は、むしろ自分が話すことで誰かの役に立つなら話せたらなと思っています。

—大会で印象的だったことはありますか。

(なっちさん)印象に残っているのは、最後の方に戦ったチームが女性も多くて楽しそうだったこと。試合が終わってから女性の方に「ビッグカップ優勝おめでとうございます」って言ってもらえて、私試合出てなかったのに覚えてくれていて嬉しかったです。

つながりと縁の先に



—今後FYOとしての活動を継続していく予定は。

(りょうさん)ダイバーシティカップをきっかけに月1回の練習をやらうとなったので、定期的に練習して、11月に宮城県で開かれる大会に出ようと思っています。

(なっちさん)負けず嫌いなので練習しようかなって思っています(笑)それと、先日母と話していて、なんでダイバーシティカップに出たかを思い出していました。最初は友人から誘われて、その延長で若者支援福島大会やダイバーシティカップに参加し、今も交流が続いているんですよね。だからもしかしたらダイバーシティカップで出会ったメンバーと何年後かに交流してるかもしれないと思うとワクワクしますね。

(りょうさん)ワクワクするって大事だね。ダイバーシティに絡めて言うと、参加の形を増やしたいです。スポーツが得意な人だけでなく、グッズ作ったり、飾り付けしたり、模擬店を出したり、義務感じゃなくて、楽しいことをやってそれを見せびらかしていきたいです(笑)



勝ち負けだけじゃない、仲間とつながるサッカーの形を知った

さぼうと21は、日本で生活する難民、中国帰国者、日系定住者など、日本に暮らす外国出身者の自立を支援しています。今回は、学習支援室で日本語や学校教科の学習に励む若者とそのボランティアで「FCさぼうと」を構成し、大会に臨みました。ミャンマーから来日し、現在学習支援室に通っているノーリンさん、ミンウーさんに大会の感想をお聞きしました。

—大会の参加のきっかけは。

(ノーリンさん)学習支援室の先生に「サッカー大会出てみない？」って言われて。「興味あります！」って答えました。ミャンマーはサッカーが流行っているんで90%の男性はサッカーが好きですね(笑)道路でボールで遊んで、車が来たらどいて、通り過ぎたらまたやるって感じでサッカーが日常的なものでした。

(ミンウーさん)僕もサッカーが趣味で、プレーするのも観るのも好きだったので、面白そうなサッカー大会だから参加してみようと思いました。

勝ち負けだけが一番じゃない

—大会はどうでしたか。

(ミンウーさん)楽しかったです。日本の大会に出るのは初めてでした。日本の前はタイにも住んでいたんですけど、タイやミャンマーのサッカーはすごくハードで、勝つぞ！って感じだからフレンドリーな感じはあまりありません



でした(笑)でもこの大会は知らない人と話したり、みんなちゃんとルールを守ったり。だから、勝ち負けだけじゃないんだってというのはこの大会で学びましたね。

(ノーリンさん)ミャンマーのサッカーは本当に激しくて、スライディングをしたり、どんな手を使ってもいいから、まず勝てばいいっていう感じがあります。ひどい時は負けたら次の日に喧嘩に行っちゃったり…(笑)僕はそういうサッカーしか知らなかったんで、この大会はこれまでのサッカーとは全然違うなっていう感じがしました。

いろんな思いを持って、みんなで大会を作っている

—印象的だったことはありますか。

(ノーリンさん)初戦のFDAチャレンジ戦で、僕たち3-0で勝ったんです。僕たちミャンマーの人は自分たちが負けていたら「やばい、0-3だ…」って必死になると思うんです。でも彼らは、焦るというよりも仲間と笑顔でプレーしていてその姿がとても印象的でした。それで、FDAのチームの背景に何があるのかって聞いたら、身体や精神にハンデを抱えている人がいるという。だから、彼らはこの場に勝つためだけでなく新しいことに挑戦するとか、仲間とのつながりを感じるとか、そういう気持ちで来ているんだって感じました。だって、パスをミスしても人を責めるのではなく「ナイスプレー」「ナイスチャレンジ」って感じでお互いを褒めあっていたから。



(ミンウーさん)僕はサッカーが大好きだから自分がプレーすることだけを考えていたけど、行ってみたらいろんな人がいて、サッカーだけでなく、友達とか良いものがいろいろあるんだって思いました。みんなで食事したり、話したりして楽しかったです。サッカーやる人、応援する人、ドリンク係の人、みんながファミリーみたいな感じでした。あなたはサッカーやっている・私はやらないという線がなく、みんなで大会を作っている雰囲気が印象的でした。だから、勝ち負けもそんなに関係なく、それが一番じゃないんだなって思いました。

—これから頑張りたいことは。

(ノーリンさん)僕はバイトと建築の専門学校に通っています。今1年生で、2級建築士の資格を目指しています。資格を取ってから就職か、就職して働きながら資格を目指すか、自分次第ですけど、頑張りたいです。

(ミンウーさん)僕は、焼肉屋で働いています。レストランの仕事は初めてだけど、今家族と一緒に住んでいるので頑張っています。他の仕事のチャンスをゲットするためにも、日本語をもっと頑張って勉強したいと思っています。



ゴールの喜び・敗北の悔しさをこれからのチーム作り、自分自身の生活へ

野武士ジャパンと愉快的仲間たちは、ビッグイシュー販売者、元路上生活者、ボランティアさんで月2回練習をしています。今回は、プレイヤーとして参加したビッグイシュー販売者の金塚さん、山下さん、岡本さん、そして現在ボランティアとして関わっているビッグイシュー卒業生の入沢さんに大会の感想をお聞きしました。

「大会」という身近な目標の存在

—大会に参加したきっかけは。

(金塚さん)ビッグイシューの販売を始めて何日か経ったときに、事務所でサッカーのポスターを見つけて参加してみようと思いました。その時期は、第1回のダイバーシティカップが終わった直後で、大会などは意識せず練習を楽しむ感じでした。その後、12月のチャリティ大会で初めてフットサル大会に参加し面白くて、今回のダイバーシティカップがどんどん楽しみになりました。去年の10月から練習に参加を始めて、休んだのは1回。毎回欠かさずに参加しています。

(山下さん)昔、野武士ジャパンがホームレス・ワールドカップに出ていたことは知っていたのですが、それ以降に身近で参加できる「大会」が

なかったんです。それで、金塚からの誘いもあって今年の1月くらいから練習に参加するようになりました。大会が7月で半年後だったから、サッカーを始めると同時に自分の生活もステップアップし頑張りたいと思いました。

(岡本さん)僕は前に一度ビッグイシューの販売を辞めてしまって、事務所に顔を出さない時期があったんですけど、今年から復帰してサッカーの練習にも参加するようになりました。今回は雨でも販売を頑張って、サッカーを頑張ろうっていう意気込みで続けています。

(入沢さん)僕はいろんな方の支えがあってビッグイシューを卒業できたので、今回の大会は裏方として支えたいと思いボランティアしたいと連絡をいれました。今回の大会では得点板係を担当しました。暑かったです(笑)

—大会前の練習の様子はどうでしたか。

(金塚さん)練習のあとに野武士のFacebookページを見ていたら“どっかの誰かさん”が満面の笑みでハイタッチしていた写真があったんです。自分なんですけど(笑)事務所のスタッフさんに「いい笑顔ですね！」って言われたのが嬉しくて、昔から目立つのは好きじゃないんですが、そういう笑顔になれる瞬間って悪くないなって思って、毎回の練習に参加しています。



(山下さん)大会前、自分すごいゴールを決めていたんですよ。大会に向けては「勝つぞ、絶対シュートしてやる！」っていう気持ちでした。優勝は難しいかもしれないけど、一勝はしたいなっていう気持ちで。でもふたを開けてみたら、厳しい結果が待っていました…(笑)

すべてが凝縮された、チームとしてのゴール

—大会はどうでしたか。

(金塚さん)どのチームも強かったです！でも、開会式で山下と前に出てチーム紹介の挨拶を300人くらいの前でしたのですが、あれはチャレンジで印象深かったですね。

(岡本さん)僕は人数が多かったのでチームを3つに分けて交代制で出たんです。でも、最初の方は全然勝てなくて、コーチが「どうやって

チーム分けしたらいいと思う？」と問いかけをしてくれ、自分は「1つを強いチームする」という案も出したんです。でも、それだと他の2チームのバランスが悪くなっちゃうし、一緒に練習してきたメンバーなので、もう一度みんなで話し合っ、メンバーの組み合わせなど考えながら試合に臨みました。

(山下さん)試合にはたくさん負けたけど、でも野武士大阪戦は意地を見せたと思うよ。大阪戦でのゴールは、今までの苦勞すべてが凝縮された感じ。「やっと入れたな〜！」って。ゴールを決めたあとみんなでハグしたのも忘れられない印象的だったな。岡本くんのゴールもすごかった。キックインからディフェンスに当たって入っていたよね。

—交流会はどうでしたか。

(山下さん)交流会では、仕事先で挑戦してみたいことを話したり、来年も試合をしたいっていう話もあって楽しかったですね。シリアの人とも喋って、彼らも母国でサッカーやってたけど、日本はかなり暑かったみたいです。でもまた来たいっていう話も出てこれからも続くイベントだいいなと思っています。

(入沢さん)自分はボランティアとして片付けを頑張っていたので交流会は参加できませんでした(笑)

大会後に見えてきたチームの輪郭

—今後に向けては。

(山下さん)ディフェンスを強化したいですね。もっとチームプレーをしておかないと、パスが通らないから、チームとしてのレベルを上げたいです。負けるのは悔しいですね。試合後、

金塚と語り合いました。悔しいよなって。僕個人としては、パス練習をしたり、もっと周りを見てプレーできるようになりたいです。試合中は熱くなって周りが見えない部分もあったから、冷静になって周りを見るように頑張りたいと思っています。

(金塚さん)自分が個人的に感じたことは、大会の前後を比較すると、大会後の方が“チーム”ということ意識するようになりました。「チームがどうだ、どんな練習しよう」といった話し合いも増えてきていて良いことなのかなって思っています。今は練習で息が上がる場面もあるので走り込みをしたいですね。

(岡本さん)僕はループパスが好きなんですけど、これからは周りをうまく使っていこうかなと思っています。攻めだけでなくディフェンスも強化していきたいですね。



チームとして、個人として次のステップへ

—新しいチャレンジで何かやってみたいことはありますか。

(岡本さん)大阪と練習試合をしてみたいです！でも対戦だけでなく交流もしたいのでミックスゲームもしたいですね。

(金塚さん)大阪との試合もいい意見だね。先日のFCさばうとの合同練習も面白かったんです。自分たちのチームの練習だけだと外の様子がわからないから、他のチームとやるっていうのは世界が広がっていいと思うんです。

(山下さん)あとはチームとして「どこを目指してるの？」ということを考えていきたいですね。もちろん来年もダイバーシティカップがあったら出たいですが、大会だけでなくチームと個人としての目標を考えていきたいです。

—来年に向けて、サッカー以外でも目標はあり

ますか。

(山下さん)今できることをコツコツとやるのが次につながると信じているんです。生活については、まずは家を探すことですね。実は自分昔こんなに笑顔でいらなかったんです。でも、金塚から大らかさや笑顔でいることの大切さを学んだんです。一緒にボールを蹴っていたら性格が似てきくかもしれません(笑)

(金塚さん)似ていますかね(笑)自分も安定した住まいを得たいですね。フットサルは地道に続けていきたいです。

(岡本さん)自分はまだ先のことは考えられていないので、まずは今の状況で1日1日を頑張りたいです。

(入沢さん)自分はアパートに入っているんですが、もっと安定した生活をできるようになりたいです。ダイバーシティカップは、今回はボランティアとして参加したので、次回は選手としてもう一度チャレンジしてみたいですね。

仲間と楽しさ・嬉しさを共有する、新しいフットサルの形

文化学習蹴球団は、若者の学習支援や居場所づくり、就労支援を行うNPO法人文化学習協同ネットワークの交流スペース「Link(リンク)」に通っているメンバーで構成されたチームです。今回は、メンバーのハヤサキさん、ニイノさん、加藤さん、中村さんに大会の感想をお聞きしました。

みんなで行って見たら、意外と楽しかった

定期的にフットサルをしていると聞きましたが、大会への参加経験を教えてください。

(ニイノさん) 去年の12月くらいに、他の団体と合同でフットサルをする機会があるということで、Linkのみんなに参加して、そこから月1回みんなに参加するようになりました。僕は中学でサッカー部を途中で辞めてしまったんですが、10数年ぶりにやったサッカーが本当に楽しかったんです。レベルが高いわけではないし、経験者も少ないけど、とにかく楽しい。なのでこういう大会に出られたら楽しいなと思って参加しました。もう一度、自分のチームを持てたというのもすごく大きかったです。

(ハヤサキさん) 僕はもともと運動するのが苦手で、みんなが行くって言うので行ってみたら

意外と楽しかったです。下手なりに少しずつルールも覚えながら、楽しんでやっている感じでした。

(中村さん) 僕はフットサルが得意ではないけど、身体を動かすのが嫌いじゃなかったので行ってみました。月1回の練習ではフットサルの後に交流会の時間もあるって、今日のフットサルどうだった?とか、お互いの近況報告するんです。そこでは自然と会話が生まれて、大会でも他の人と一緒にやれたら楽しそうだなと思って参加しました。

(加藤さん) 僕はサッカー経験がないんですが、体を動かすのが好きで参加しています。大会の話もきいて、楽しそうだなと思って参加しました。ダイバーシティカップのコートはいつもの練習場の倍の大きさがあって、ちょっとハードでしたね(笑)

—大会はどうでしたか。

(ニイノさん) 大会は相手が強くて大変でした。でも僕が一番嬉しかったのは、僕がアシストして中村くんが点を決めてもらったことです。

(中村さん) あれは僕としても嬉しかったですね! その瞬間のことはしっかり覚えています。

(加藤さん) 僕はインシャッラーで怪我をしてしまって…。怪我しないような体づくりをしてから出たいですね。今日から牛乳たくさん飲みます(笑)



自分がやりたかったスポーツは、こういうのだった

—皆さんにとってフットサルの機会とは。

(ニイノさん) 僕らがいつもやっているフットサルは誰も点数を数えてなくて、どっちが勝ったかも誰も気にしてないんです。上手くなろうとか強くなろうって言う目的はなくて、とにかくプレイすること自体をみんなが楽しんでいて、「スポーツって本来こういうものだよな」って感じています。僕は中学で部活を辞めたとき、サッカーが全然楽しくなくなってしまったのですが、本当はこういうサッカーがしたかったって、ここで見つけられたような気がしています。だから、今はいかにみんなで楽しくプレイできるかっていうのを考えてやっているし、そういうサッカーの場に出会えたことがすごく嬉しいですね。みんなにも感謝しています。

(ハヤサキさん) みんなで「楽しい」とか「嬉しい」とかを共有できるのがいいなと思っています。普段ここ(文化学習)でやっていることは、コミュニケーションを上手にできるようになるとか、わからないことを聞けるようになるとか、次のステップに向けてのトレーニングのような感じなので目的がちよっと違います。フットサルはみんなが「楽しいよね」って共有できるのがいいですね。

(中村さん) 普段は話させないメンバーでも、フットサルだと自然とハイタッチしたり、そういうところが楽しいなって思います。日常生活ではいきなりハイタッチすることなんてありませんから(笑) 大会ではかなりボコボコにされてしまったので、次回大会があるとしたら、楽しみながら勝つための練習もできたらいいなって思っています。

大会を通して再会した仲間とともに、純粋にサッカーを楽しめた

養護施設出身者の就労をサポートするフェアスタート。社会的養護を卒業した若者のみ100%で構成されたチームです。昨年のダイバーシティカップでは見事優勝を飾り、今回も優勝候補として大会に臨みました。昨年に引き続き参加してくれたリーダーの中島さんと、フェアスタート・代表の永岡さんに大会の感想をお聞きしました。

・フェアスタート

「社会的養護」の対象となる子ども達・若者達が、社会全体で育まれていくような機会創出を目指した就労支援事業を展開。入所中のキャリア教育事業、退所時・退所後の就職あっせん事業、退所後のアフターフォローイベント事業などを実施。

—参加メンバーについて教えてください。

(永岡さん) 去年のメンバー 4人に加えて、あとは新しいメンバーでした。サッカーを本格的にやっていたのは二人かな。あとは、高校まで野球部の若者と、陸上部で足の速い選手だった若者です。建築系の仕事に就いている子だと土曜日に仕事が入ることが多いので、出られなかった若者もいたんですけどね。

—事前に練習などはしましたか。

(永岡さん) 僕は練習をおろそかにしてしまっていて…(笑) 一人はフットサルチームに入ってやっていたみたいなのですが、各々練習しつつという感じで、特にチームプレーや連携プレーなども練習せずに大会を迎えました。

(中島さん) 去年は僕もフットサルを割とやっていたんですけど、今年3回か4回目くらいでした。どちらかというと休みの日は野球ばかりしていました。野球についていうと部活でやっていたときより今の方が楽しいです。先生に怒鳴られたり殴られたりしないし(笑) 今は自分で考えて練習できたりするのが楽しく週1回くらいやっています。

負けても純粋にサッカーを楽しめた

—大会はどうでしたか。

(中島さん) 大会自体のレベルが1回目よりすごく上がったかなと。大会では2回も負けちゃったんで、練習をおろそかにしてはいけなくなっていると思いました。でも、去年と変わらず楽しめたかなとは思っています。負けても揺めるとかそういうこともなかったのです。

(永岡さん) 1試合目の福岡のチームを抑えれば今年もいけるねって話をしていたんですけど、3,4試合目が想定外だったんですよ。まあ采配ミスもありましたけどね。5人だけで替えるメンバーがいなかったの。今回は若者100%にこだわったので、誘う絶対数にも限界があったりして。体力をもっと温存できていれば3試合目勝っていたかなと。

再会の場としてのスポーツの場

—交流会はどうでしたか。

(永岡さん) 今回申し訳なかったのが、すごい身内で楽しいトークが繰り広げられちゃって(笑) わりと身内で仕事の話で盛り上がり、他のチームとの交流がなかなかできなくて…。



(中島さん) そうですね。一人は4月に僕の野球に誘って、もう一人は2月に一回飲みに行ったくらいではかのメンバーは久しぶりの再会でした。「最近どうしているの?」なんて話をしていたらあっという間に時間が経ってしまっていて…。でも、卒業後もこうして再会の場をもてるのはありがたいことだなと思っています。

—これから頑張りたいことは。

(中島さん) 去年のダイバーシティカップの時に話をした「仕事を続けている」という目標達成はしているのかなと。それと、仕事は仕事としてしっかりして、仕事の場以外にもいろんなコミュニティが持てたらいいなと思って、多少は増えたと思います。やっぱりスポーツが自分

らしくいられる場なので、スポーツの機会が多いですね。なので、来年に向けては大きな目標は特になくて、今の仕事を続けた上で、変わらずみんなと元気に会えたらいいなと思っています。(永岡さん) 僕は、フェアスタートの卒業生個々人と長く細く何十人と繋がっているんですけど、みんな会いたくても休みがバラバラなので、一同で集まるっていうのはなかなか大変なんですよ。そういう意味でこういった大会のような、自然とみんなが楽しめるような行事はありがたいし貴重ですね。シャイなメンバーも多いので、ミックスゲームとか、他チームの人とサッカーをすれば、もっと話しやすくなるかもしれませんね。

船の旅とサッカーがつくるダイバーシティ社会

地球一周をはじめとする「国際交流の船旅」を企画し、これまでに5万人をこえる人が参加したピースボート。昨年のダイバーシティカップには、サッカーをテーマに国際協力を行う「ピースボールプロジェクト」のメンバーが参加。今大会には第1回大会参加者からの呼びかけで新チームが参加。ピースボートに乗るまで「ダイバーシティ」とは真逆の世界にいたという任田さん。ピースボートとの出会いからダイバーシティカップに参加しての感想をお聞きました。

ピースボートとの出会い

―ピースボートと出会ったきっかけを教えてください。

僕のピースボートとの出会いは「素敵な人」との出会いです。

父も母も教員をしていて、幼い頃から漠然と将来は教師になりたいと思っていました。

幼少期から大学まで休まずサッカーをし、特に大学では厳しい上下関係の中、育って来ました。

部活とバイトをひたすらに繰り返す学生生活。

自分は果たしてこのまま教師になって、子どもたちに何を伝え、何を見せることができるのか思い悩む時期がありました。

そんな大学3年の冬。たまたま参加したフットサル大会&交流会での出会いが人生の転機

でした。「私は地球5周しています」と話すピースボートの職員と出会い、衝撃が走りました。

世界中にサッカーボールを届け、世界中でサッカーをする。これまで「勝ち負け」を基準にプレーすることでしか関わらなかったサッカーに新しい可能性を感じ、ピースボールプロジェクトに一気に惹かれていました。

自分が生徒だったら…地球5周している先生が担任だったら…絶対におもしろい！僕はその場で、ピースボート乗船を即決しました。

船に乗ってみると、年齢も性別も経験もバラバラ。年下の子が普通にため口で話してきたり。体育会の狭い上下関係の世界だけで生きてきた自分は、様々な価値観や生き方、人との接し方が混在しているこの場がはじめは受け入れられないところもありました。でも、一緒に時間を過ごすなかで「そういう考え方もあるよね」「そういう人もいるよね」と思えるようになり、あらゆることを受け入れられるように少しずつなっていました。

旅人は、ポジティブな方が多いイメージですが、それはいろんな人と出会い自分と違う価値観とたくさん出会っているからだ気づきました。

海外に出て世界の人に出会えただけでなく、船の旅を通じて自分の知らない世界があることを知り、多様な価値観と出会えたことが何よりの財産です。



競技以外のサッカーの可能性

―ダイバーシティカップのことを聞いたときの印象は。

普段出会えない人と交流ができて、しかも、それがサッカーという自分にとってハードルの低いものだったので、ぜひ参加したいと思いました。たぶん、大学をそのままストレートで出て、競技としてのサッカーしか知らない

自分だったら、「ホームレスの方やうつ病患者の方とサッカー、ダイバーシティ」と聞いてもあまりピンとこなかったかもしれません。

ピースボールチームのメンバーは、大学時代のサッカー部のメンバーやピースボートのボランティアスタッフに声をかけたところすぐに集まりました。普段、いわゆるサッカーやフットサル大会にメンバー集めをしようと思っても人が集まらないことがあります。趣旨に賛同し、サッカーの可能性を感じてくれたことが参加理由。こうしたきっかけを求めている証拠だと思います。

―大会はどうでしたか。

大会は日常から練習しているチームもそうでないチームも混在していましたが、みんな楽しそうにプレーをしていて良い場だと感じました。自分も純粋にサッカーを楽しませてもらい、結果的に優勝までできて感無量です。交流会では「ピースボート・ピースボールプロジェクト」



のことに興味を持ってくれた人もいて、良い出会いがもてたように思っています。

私たちも含めて、大会に来ていた参加者は様々なバックグラウンドを持った人たちです。アイスブレイクや試合を通じて、また再会したい、次に何かしたいと思えたこと自体が大きな一歩だと思います。大会後に、ほかの団体と交流を始めたり、他のチームの方がピースボートに乗ったり、具体的な行動が生まれ、様々な価値観が広がっていったら素敵ですね。

次の大会では、あのアットホームな空間を最大限に活かせるよう、対戦式のゲームだけではなく、チームを超えたミックスチームを結成してプレーしたい！と考えました。

次回も本当に楽しみです！

・ピースボールプロジェクト:これまでに44カ国に13,000個以上のサッカーボールを届け、現地でサッカー交流を展開。

ギャンブル依存症からの回復を目指す「グレイス・ロード」

山梨県にあるギャンブル依存症の回復施設「グレイス・ロード」。ギャンブル依存症からの回復を目指すメンバーがダイバーシティカップに初参加。大会に参加しての感想や「グレイス・ロード」での日常、今後についてお聞きしました。

ギャンブル依存症からの回復を目指す日々

—ダイバーシティカップに参加した経緯は。

ビッグイシュー基金から「グレイス・ロード」のスタッフにダイバーシティカップの話をもらって、メンバーで話をしていたら面白そうだから行こうと10人以上の参加希望者が集まりました。参加理由はそれぞれで、「宿泊型の施設での生活の気分転換になるから参加したい」という声や「身体を動かすのが好きだから参加したい」という声がありました。「グレイス・ロード」のプログラムは、ギャンブル依存症者の自助グループ(GA)へ通うことやギャンブルを絶って「ハウス清掃・グループミーティング・調理学習プログラム・ハウスミーティング」など、

スケジュールに沿っての回復プログラムを住み込み型で受けます。自分と似た経験をした人と毎日顔を合わせることで日々励まされるのですが、一方で、外の人と会う機会が減ってしまうので、ダイバーシティカップは、施設外の人と交流をする良い機会になると考えた者が多かったと思います。

—大会はどうでしたか。

自分たちのチームはスポーツをしていた若いメンバーが多く、「グレイス・ロード」のプログラムの中にも「ソフトボール」や「ソフトバレー」があり定期的に身体を動かしているの、行く前は「優勝したらどうする？」みたいな話をしていたのですが、驚くほど動けませんでした。みんな前には走れるのだけど、戻ってこれない…(笑)

メンバーの中には、大会を楽しむにしていって前の晩に眠れないままプレーをして本来の力を発揮できなかった人もいました。本当は試合も交流会も楽しめたかったのですが、熱中症気味になったメンバーがいて交流会を途中で抜ける形となっていました。

でも、みんな負けず嫌いなので、施設に戻ってから、体力ないな…次回出るときには最低でも2か月は練習をしてから出たいといった話も出ていて刺激にはなったようです。



—チームのメンバー同士がとても仲が良いように見えました。

そうですね。みんな施設に来た頃は元気や自分への自信を失っています。ギャンブルへの依存によってお金も時間も信頼も全て失ったというメンバーも多くいます。でも、ここに来て同じような境遇のメンバーと出会い日々のプログラムや生活を通りながら、未来に向かう仲間ができた感覚があるのだと思います。「グレイス・ロード」の生活では、自分の生まれ育った環境とは違う地域で、携帯も持たずに生活をしているので、合宿生活をしているといえます。そういうメンバーでフットサルをしたので、大会結果は本人たちが思ったほど動けなかったのかもしれませんが、メンバー同士の仲は良いように思います。

中には、人とコミュニケーションをするのが苦手でギャンブルに入れ込んでいったメンバーもいるので、こうしたスポーツや人とのつながりの場は意味があるように感じます。

これからに向けて

—交流会では「サッカー以外にもこれから頑張りたいこと」というテーマで話す時間があつたのですが、グレイス・ロードの皆さんはどんなことを考えていますか。

(てつさん) 親に相当迷惑かけてきたので、自分の力でギャンブルをやめて自立した生活を送って周りに迷惑をかけないでやりたいです。最後までやり遂げたことっていうのがなかなかないので、小さい目標でもいいから達成したいです。



自分を否定してしまう部分があるので、好きになれるようになりたいです。

(けんたさん) これまで自分も、家族にもしんどい思いをさせてしまったので、周りの人に対して何かできるっていう余裕はないんです。自分が楽しく生きられるようになること。フットサルもだけど純粋に物事を楽しめるということが、本当の自分に返ってくることだと思っています。自分は自立に一度失敗しているので、今やるべきことは目の前のことを1つ1つ達成していくことだと思っています。

(せいやさん) 8年前に他の施設に入ったんですけど、その時はどん底で笑えなかったし、暗かったです。でもこっちにきて今はギャンブルをやめて仲間と一緒にスポーツできたりするのが楽しいです。スポーツは好きなので、これからもやっていきたいです。グレイス・ロードの皆はフレンドリーで、わからないことは聞いたりできるし助けてくれます。今まではギャンブル場が居場所だったんですけど、今は仲間がいる場所が居場所だから大切にしていきたいなと思っています。

強い人と戦うこと、自分の世界を一步出ること、2つの挑戦

ちいむ小心者は、若者たちの就労をサポートするNPO法人育て上げネットのスタッフ、現役生、卒業生を中心に構成されたチームです。今回は、現在育て上げネットの就労支援プログラム「ジョブトレ」に通うM²さんと、スタッフの阿部さんに大会の感想をお聞きしました。

予想外の怪我がありつつも

―大会参加のきっかけは。

(M²さん) スタッフの齋藤さん経由で声をかけてもらいました。自分は小中高とサッカーをやっていたので、サッカーも好きですしチームの力になればと思って。実は、去年の第1回大会にも参加して、「小心者」なりに優勝を狙っていたのですが、勝てない試合が続き、今回は勝つにはどうしたらいいかっていうのを考えていました。チームメンバーのジョブトレ生同士は普段から仕事に向けてのトレーニングをしていますし気心も知れているので、チームの雰囲気は良かったです。やる気満々で、目標はもちろん優勝でした。

―大会はどうでしたか。

(M²さん) みんな積極的に動いてくれて、パスの引き出しとかも文句がないっていう感じでした。でも実は大会のアイスブレイクの時に予想外の怪我をしてしまったんです。フィールドプレーヤーはできないのでキーパーをすることになったんですけど、逆にそれがよかったのかなって思っています。

(阿部さん) 裏話をすると、彼がアイスブレイク中にコートから突然いなくなっちゃったんですよ。そしたら足を痛めちゃったみたいで、「せっかく意気込んで来たのに、なんてことしてくれるんだ！チームの要じゃないか！」って(笑)でもキーパーは出来るってことで、そしたら案の定失点することなく勝ち上がっていききましたね。5試合

して1失点というのはすごい結果ですよ。

―大会で印象的だったことはありますか。

(M²さん) やっぱり上手い人、体力のある人との差は感じました。普段、強い人と試合をする機会はなかなか無いので、ありがたいというか、もっとやりたいっていう気持ちになりました。

(阿部さん) 他のコートの試合を見ていても、みんなすごく元気で勢いがあるというか、本当に楽しんでいるって思いましたね。ちなみに僕たちトーナメントでじゃんけんで敗退してしまっただけです。じゃんけんだから、「運には負けたけど試合には僕たちは負けてない！」って言い切っています(笑)

自分の世界を出るという挑戦

―今後、試合したい、交流したいというチームは。

(M²さん) それは、優勝したピースボートやフェアスタートですね。上手い人と直にやるっていう経験って、楽しくないですか？こっちが不甲斐ない結果になるっていう申し訳なさはあるんですけど、個人的な感情としては上手い人とやってみたいっていう気持ちはありますね。あとは、自分人見知りで、知らない人がいると気後れしてしまって、ダイバーシティカップの食事会・交流会には参加できなかったんです。今後の目標としては、自分1人では勇気がいるので、誰かチームメンバーと一緒にそういう場所にも挑戦してみようかなって思っています。



―スポーツ以外でも挑戦したいことはありますか。

(M²さん) 今、ジョブトレーニングでパソコンのエクセルなどの練習をしているので、地道に練習を重ね就労できたらと思っています。

(阿部さん) M²さんの最初の施設見学の対応したのが自分だったんですが、最初は明らかに人に言われて来たオーラがでていて、どうなっていくのかなと不安もありました。今はジョブトレを通して人との関わりとか、新しく入ったメンバーに声をかけるとか、そういう面ですごく成長して、良いところがたくさん出てきたと感じています。

(M²さん) 自分はサッカーが好きでサッカーをしている時は人見知りをしないでいられるんです。最近は1年ほどジョブトレに通う中で、仕事への意識や姿勢ができてきて、仕事というモードになることで、人見知りが減ってきた

ように思います。そういう意味では、やっぱり、次回のダイバーシティカップに出るのであれば優勝を目指すのもですが、他チームとの交流も頑張りたいですね。

(阿部さん) M²さんは、スポーツをしている姿とジョブトレで見せてくれる表情が違うんですよ。だから勝ちにこだわるのもいいんですけど、スタッフとしては、他のチームの人と話すことで、背景が重なっていき共有できることがあるかもしれない。それがスポーツを通じたきっかけ作りにもなるのかなって思うので「飛び立ってこいよ！」という想いもあります。「小心者」というチームも大事にしてほしいし、他のチームの人とミックスチームで混ざってやるのもいいのかなって思っています。

(M²さん) そうですね。ミックスゲームした後なら話せるかもしれません…(笑)

本当に困っている人達にこそ、スポーツの場が必要 もしかしたらダイバーシティカップはそんな場になっているのかも

左手に先天性の障害を持ち、アルコール依存や不安定な家庭環境が原因で一時はホームレス状態に陥った大江さん。現在は路上生活を脱し、パリでのホームレスW杯も経験した彼に、ダイバーシティカップの感想をお聞きしました。

—大会の感想を教えてください。

本当に純粋に楽しかったです。第1回大会は東京のチームに自分一人が混ぜてもらおうという形だったのですが、今回は野武士ジャパンの大阪チームとして参加できたことが特に良かったです。一勝もできなかったんですが、はったりやら応援やら、一番賑やかなチームだったと思います(笑)

—印象に残っている試合はありますか。

野武士ジャパンの東京チームとの試合ですね。正直勝てると思っていたんですが、東京チーム

はやっぱりホームということもあって、チームとしてまとまりがあるように感じました。大阪はアウェーから負けたんであって、今度は大阪のホームで試合をして決着を付けたいです(笑)

—試合後の交流会はいかがでしたか。

正直もっと時間が欲しかったぐらいですね。もちろん色々な人と話はできましたが、ギャングル依存症の団体の方とは、自分もアルコール依存を経験しているので、アディクションつながりで、ちいさなミーティングの場をもてたら良かったです。



—今後、何かチャレンジしたい事はありますか。

実は最近、介護の資格の取得に向けて動いているんです。大阪チームのコーチが介護福祉士をしている関係で、話を聞かせてもらうのですが、講習だけでとれる資格からとって、いって就労に活かせるようにしたいです。自分は障害を持っているんですが、「障害者をサポートするのは何も健常者だけちゃうぞ」ってところを見せたいんですね。わたしも色々な人のお世話になったんで。また自分みたいな人間が動けたら、周りの人間はもっと動けるといいますし。

—寄付や、大会運営に関わってくださった方にメッセージなどありますか。

ほんまにありがたいし、すごいよね。一人ひとりお会いして感謝の言葉を述べたいぐらいです。寄付だけじゃなく、参加してもらえれば、楽しんでたり頑張ったりするメンバーを直接見てもらえるのって思います。

今年はリオパラリンピックがあったけど、大会に出られるのは、もちろん本人の努力もあるけど、一部の恵まれた障害者だけです。でも、そうじゃない障害者やいろんな困難を抱えている人もスポーツの場を求めています。寄付で成り立っているダイバーシティカップだからこそ、そんな人も参加できる場になっていると思います。今後もそういう形で続いてほしいし、自分もそういう手助けをする側になっていきたいです。

チームメイトの意外な一面を知った、記憶に残る大会

国内外で実施するボランティア・ワークキャンプを通して、若者のきっかけづくりを応援するNPO法人good!(グッド)。事務所は、学生、社会人、フリーター、ひきこもり経験のある若者など、幅広い世代・背景を持った若者が集まる交流の場になっています。また事務所は共同生活寮にもなっていて、ひきこもり経験のある若者、グッドを支える社会人やインターンの学生など、様々なメンバーがスタッフと共に生活しています。今回は、スタッフでチームリーダーの佐藤吉行さん、参加者の鈴木ちひろさんにダイバーシティカップ初出場の感想をお聞きしました。

—good!と出会ったきっかけを教えてください。

(鈴木さん)大学1年の時に初めてワークキャンプに参加したのがきっかけです。楽しかったので、その後3回参加しました。今はインターン生としてgood!に関わっています。

(佐藤さん)good!には寮生、社会人、スタッフ、いろんな人が一緒に住んでいて、さらにキャンプの参加者やインターン生も来てくれています。大きな家族というか、昔の田舎の家みたいな感じなんですよ。そんな中で若者たちが成長する瞬間に携われるのがすごくいいなと思っています。

—初出場でしたが、ダイバーシティカップのことを聞いたときの印象は。

(鈴木さん)中学の時はバドミントン、高校では和太鼓をやっていて、もともと体育が好きでした。なので、今回の大会も張り切っていました。

(佐藤さん)参加メンバーの声かけは、スポーツイベントを担当するインターンにお願いしました。最近good!に関わり始めたメンバー、インターンや寮生たちを中心に声をかけて、体を動かすことが好きなメンバーが集まりました。みんながつながるきっかけの1つになったらいいなと思って参加しました。

—大会はどうでしたか。

(佐藤さん)いろんな団体に参加していてレベルもバラバラ。「こりゃ勝てないな」というチームと「頑張ればいけるんじゃないかな」というチームがあって面白かったですね。時間が短い試合形式も、本当に暑い日だったので、ちょうどよかったと思います。僕たち普段はメンバー同士でフットサルをやることが多いので、他団体のチームとの試合は面白かったし、よいチームビルディングになったと思います。また、参加した人たちが他のチームを応援したり、声をかけ合ったりしていて、全体の雰囲気がとてもよかったと思います。

(鈴木さん)みんなすごく生き生きしてたなって思います。自分のチームだけでなく、他のチームもチームワークがいいなって感じました。予選とトーナメントで2回対戦することになったFYOとは試合の合間にたくさん話をして交流することができました。

(佐藤さん)FYOとの試合でゴールを決めたうちのチームの女の子がFYOと同じ福島出身なんです。試合の後、FYOのキーパーの方から「あのシュートよかったよ」と声をかけてもらって、福島から持ってきた旗に寄せ書きもさせてもらって、すごく良かったですね。



—チームの雰囲気はどうでしたか。

(佐藤さん)おとなしいイメージだったメンバーが強烈なボレーシュートを決めて、「お前サッカーそんなにうまかったっけ？」みたいなこともあって(笑)普段の生活で感情を表に出すことってあんまりないじゃないですか。負けて悔しいとか、ハイタッチしちゃうとか。みんないつの間にか熱くなっちゃってましたね。

(鈴木さん)今まで一緒に活動していても、気づかなかった一面が見れました。あのボレーシュートは本当に神がかったでしたね！普段は本当にナヨナヨしている子なんです(笑)あの時は「おっ！」って。審判の人も笑っていました。

—大会を終えて、いかがですか。

(佐藤さん)普段、ワークキャンプを中心とした活動の中で、いろんな背景を持った若者たちと出会うのですが、やはり大学生の年代の若者が

中心になります。この大会にはもっと上の世代の方とか、難民の方とか、さらにもっと幅広い年代と背景を持った方たちが参加されていて、あまり接する機会のない人たちと交流ができて新鮮でした。時には普段と違う層の人たちとのつながりを広げてみるのも面白いなと思いました。

(鈴木さん)私はスポーツの中でも球技が好きで、サッカーやバスケのような手軽にできる種目をやることが多いのですが、もっと他の種目にも挑戦してみたいなと。大会のレベルも結構高かったんで、力の差が吐にくいように、みんなで何か新しいスポーツに挑戦するのも面白いんじゃないかなと思いました。

(佐藤さん)「ビッグカップ3位」って何も説明しなければ、「おっ、3位なんだ！」ってなるので、かなり満足です(笑)でも結果よりも何よりも、あの強烈なボレーシュートのような楽しい思い出がみんなの記憶に残る最高の大会になりました。本当にありがとうございました！

社会からの“ラベル”を“個性”にするきっかけとしてのダイバーシティカップ

うつ病などの精神疾患を経験し、同じ社会復帰支援サービスを受けている仲間・卒業生で構成されたオムハビユナイテッド。昨年度にも出場し、現在中心となってチームを運営している一之瀬さん、たけしさんにチームの活動の様子と今大会の感想をお聞きしました。

—参加メンバーについて教えてください。

(一之瀬さん)参加希望者は多かったのですが、極力去年出ていない人に参加してもらいたいのと思っていました。今回はフレッシュな顔ぶれにしました。対外的な試合は初めてという人も多かったですね。

「行動実験」の場としてのフットサル

—去年以降、チームの活動がさらに活発になったと聞きました。

(一之瀬さん)昨年の大会後にコーチが就任して、先日の練習でもかなり走られました…(笑)チーム全体としての人数は30人くらいで、1回の練習には10人前後が集まる感じです。オムハビの練習は月2回程度、それ以外にダイバーシティカップなどで交流した他チームとの合同練習や対外的な大会があったりします。いつも決まったメンバーだけでやる練習だとマンネリ化しちゃうので、対外的な機会は意識的に増やしています。

(たけしさん)オムハビの場にはいくつか役割があると思っています。社会復帰のトレーニングの一つで「行動実験」というのがあるんですが、普段やらないことをあえてやってみよう、新しい行動にトライして、振り返ってみようというものです。例えば「運動が苦手だったんだけど、フットサルを行動実験としてやってみよう」と。試しにやって、振り返ってみたら、体を動かすのが楽しい！と気づいたり。もちろん失敗してもいいし、そういうことができる場としてフットサルを使ってもらえたらと思っています。あとは、

復職施設を卒業した後のコミュニティの場でもあるのかなって。やっぱり病気を抱えて社会復帰したあとも大変さはあるんです。新しい環境で一人きりになってしまうこともある。でもオムハビの練習にあれば同じような経験をした仲間がいるし、それは一種の安心感のようになって思っています。

—大会はどうでしたか。

(一之瀬さん)チームメートは楽しめたって言うくれましたけど、試合の結果自体は本意でしただね(笑)。普段練習していることがゲームで表現できなくて…もっとやれたよねって。でも大阪野武士の方々は負けていてもすごい元気でしたね。「次は負けへんで！」って。すごく前向きだと思っていました。

(たけしさん)うん、みんなの力を出せなかったっていうのが悔しかったですね。でも交流会含めてダイバーシティカップを見たときにすごく面白かったです。交流会で外国の方と一緒にグループになったんですけど、去年は「日本人」という共通点があったけど、今年はその枠自体なかったりして。



個性として自分を肯定できるきっかけに

—印象的だったことはありますか。

(たけしさん)大会に出て、マイノリティってそもそもなんだろうって考えさせられました。ダイバーシティカップに出るチームは社会的にマイノリティの名前がついているんですけど、フットサルをしたりコミュニケーションする上では関係ないんじゃないかと。ラベルがあるからその人に会う前に妄想が膨らんじゃう、だけど、実際に会って話すと、そのラベルって本当は何なんだろうって気づかされました。私も病気で、自分に対してラベルを貼ってしまったところがあったんですけど、こういう場に参加することで自分に貼っていたラベルに疑問を感じるようになりました。フットサルをして、実際にいろんな人と直接会って話せる機会があるのは良いことですね。

(一之瀬さん)マイノリティを肯定するとそれが個性になると思うんです。精神疾患とかで話するのが苦手な人とかでも、大会を通じて「あ、いろんな人がいるんだ。自分は自分でいいんだ」ということをチームのみんなも感じてくれたん

じゃないかなと思います。

—これから頑張りたいことは。

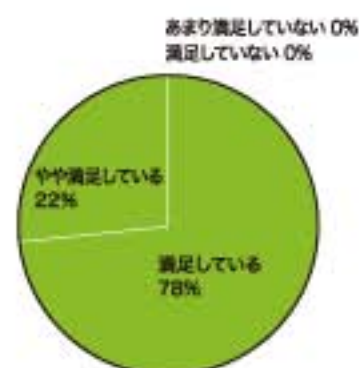
(たけしさん)まずは自分たちのチーム運営に必死ですね(笑)あとは、他のチームとゲームや交流してみると、今まで気づいていなかった自分たちの特徴、個性に気づいたりできるので、共生と言いますか、ダイバーシティカップのように色々なチームと出会い交流できる機会を増やすことも大事なかなって思っています。

(一之瀬さん)社会復帰のトレーニングを利用して、卒業した人も前向きに元気になる場を作れたらと思っています。やっぱり、トレーニング中は「将来どうしよう」とか、卒業後は「病気が再発するんじゃないか」とか不安な気持ちもあるので、我々がお手本、と言うと大げさかもしれないけど「自分たちでも大丈夫なんだ」として自分を肯定できて、各々の目標に向けてステップが踏めるような場になったらいいなって。コーチも「オムハビはみんな飲み込みが早いので絶対強くなる」と言ってくれているので、これから楽しみです。

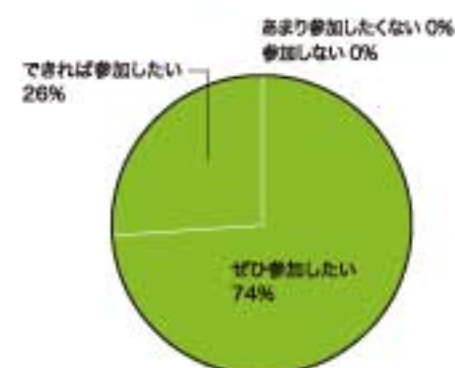
アンケート結果報告

開催日当日、参加者から集めたアンケートの結果を報告します。

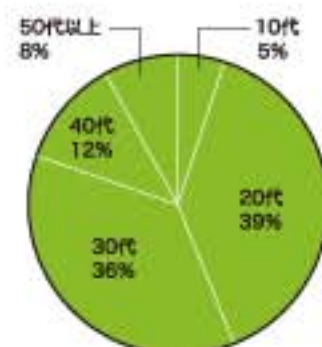
①ダイバーシティカップ満足度



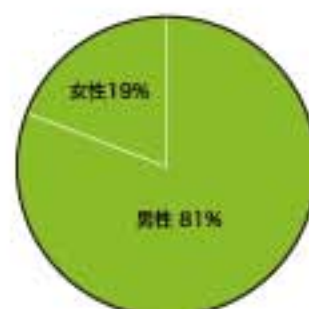
②また大会が開催されたら参加したいですか？



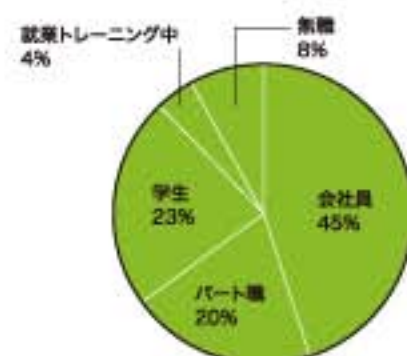
③年齢



④性別



⑤職業

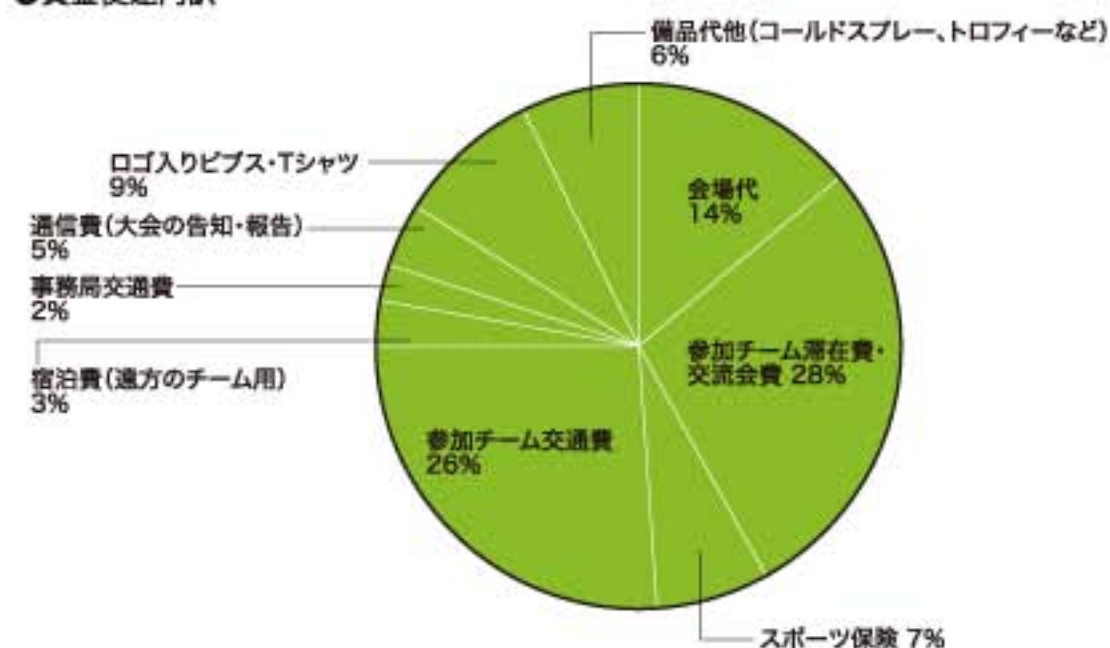


収支報告

収入内訳	金額
クラウドファンディングからのご支援 (READY FORより91名)	885,794
チャリティ大会参加費 (2015年11月開催)	354,323
その他寄付	532,709
合計	1,772,826

資金使途内訳	金額
会場代	244,050
参加チーム滞在費・交流会費	499,520
スポーツ保険	128,220
参加チーム交通費	466,885
宿泊費 (遠方のチーム用)	52,800
事務局交通費	37,100
通信費 (大会の告知・報告)	78,910
ロゴ入りビブス・Tシャツ	163,725
備品代他 (コールドスプレー、トロフィーなど)	101,616
合計	1,772,826

●資金使途内訳



おわりに みんなが居心地のよい社会にむけて

この報告書を手にとお読みくださったみなさんは、どんなことを感じられたでしょうか。わたしの心をとらえたのは、ページから溢れ出す笑顔と、あたたかさと、優しいことばの数々だ。それは第2回ダイバーシティカップという場が、そこに集った人すべてにとって心地よい居場所だったことを伝えてくれている。それぞれに多様な事情を抱えた人たちが、サッカーを介してひとつの場に集い、とびきり素敵な時間を過ごすことができた。それをみなさんにも感じとっていただけたらうれしい。もうひとつ印象的だったのは、ちょっとした？マークが浮かびあがってくることだ。

「ん？ なんでここはこんなに居心地がいいんだろう？」

ふりかえりのインタビューからは、参加した人たちがそんなフシギさを感じていたことが、うかがい知れる。このフシギな感覚の理由は、ふたつあるように思われる。

ひとつは、ダイバーシティ(=多様性)ということばにかかわる。今回集まった人たちの背景は、本当に多様だ。ホームレス、うつ病、ひきこもり、児童養護施設出身、被災者、難民、ギャンブル依存…。リストはまだまだ長くなる。種類の違う困難を経験した人たちがお互いを知り合うことは、ダイバーシティカップが大切にしていることのひとつだ。

でもあの日みんなが感じたのは、「アレ？ 違うって聞いてたけど、全然違うじゃん」という感覚だった。「みんなでサッカーやってたら、そんな違いなんてどうでもよくないか？」と。わたしたちはつい「フツー」と違う事情をみつけて、それを理由にその人を「フツー」の人たちと区別してしまう。でも人と違うことは当たり前のことで、それは同じ場を共有することの妨げにはならない。多様であることは、フツーのことなのだ。

もうひとつは、「勝つこと」と「楽しむこと」のビミョーな関係にかかわる。「サッカーは勝つためにやるものだと思ったら、ダイバーシティカップは楽しむことを一番大事にしていた。」その通り！

でも両者はもともと対立するものではないはずだ。だって、みんなは「勝つこと」を楽しんでもいたからだ。勝ちたくてムキになったり、でもうまくいかなくてイライラしたり、それをチームで乗り越えようしたり、そんな姿が浮かび上がってくる。そして「点取れてよかった！」とか、「勝ってうれし

かった！」という声も、やっぱりある。

勝つことと楽しむことは、ちゃんと両立するのだ。むしろ勝とうとするチャレンジのなかに、たくさん楽しさが詰まっている。ポイントは、結果が出たらいつまでも気にしないことと、仲間はずれを出さないことだ。勝っても負けても、みんなで勝とうとチャレンジした楽しさの価値は変わらない。それがわかっていたら、負けたって失敗したって笑顔でいられるのだ。

多様であることと、同じであること。勝つことと、楽しむこと。対立しそうなものが同居する新鮮さが、ダイバーシティカップのフシギな居心地のよさの正体だった。でももしかするとダイバーシティカップの目指す未来には、これをフシギと感じなくていい、そんな社会があるのかもしれない。

「勝つこと」は、社会に生きるわたしたちが一緒に目指すゴールだ。チャレンジがあるから試行錯誤もするし、その先の達成感もある。でもみんなが居心地のよい社会を目指すなら、自分だけではたどり着けない。サッカーでは、上手い人だけで強いチームを作ることでもある。でも、社会全体のメンバーは選べない。なのにわたしたちはサッカー以外の世界でも、目先の目的に合わない個性を切り捨ててしまいがちだ。そうやって、社会の仲間はずれが増えていく。

本来あるべき社会は、そうじゃないはずだ。時につまづくメンバーがいたら、お互いに支えながら、みんなで一緒にゴールにたどり着こうとする。その過程でそれぞれの個性の活かし方に気づき、少しずつやり方を工夫しながら、なんならゴールの場所も変えながら、進む。みんなですべてのゴールを目指してどこだろう？って考える。勝ちを目指すことも楽しむけど、仲間はずれを出しながら勝ったって楽しくない。

ダイバーシティカップは、それを当たり前にしていくための実験場だ。勝ち負けをつけるゲームであるサッカーで、勝ち負けのせいで仲間はずれを出さないこと。それがきっと目指すべき社会の指針になる。そんなチャレンジを、みなさん一緒にやりませんか？

一橋大学大学院社会学研究科
総合社会科学専攻 准教授
鈴木 直文

スポーツフォーソーシャルインクルージョン実行委員会

- ・青木弘達(株式会社リヴァ取締役)
- ・井上英之(慶應義塾大学大学院特別招聘准教授)
- ・岡田千あき(大阪大学大学院准教授)
- ・大西連(NPO法人もやい理事長)
- ・佐野章二(NPO法人ビッグイシュー基金理事長)
- ・鈴木直文(一橋大学大学院准教授)
- ・鈴木綾(四つ葉学舎・福島)
- ・土屋薫(江戸川大学教授)
- ・蛭間芳樹(野武士ジャパンコーチ)
- ・星野智幸(作家)
- ・油井和徳(NPO法人山友会理事)
- ・米倉誠一郎(一橋大学イノベーション研究センター教授)

ダイバーシティカップ報告書

2016年11月1日

発行: スポーツフォーソーシャルインクルージョン実行委員会

編集: 認定NPO法人ビッグイシュー基金

デザイン: 佐藤陽子

写真: 横関一浩、内田和穂

協力: 秋富慎司、安東久雄、入沢正彦、大石友則、川口文代、北野里実、瀬川慈人、谷本貴信、たらちゃん、橋茂生、中村未絵、根本真紀、早川幸治、福田哲郎、フットボールクラスタの皆さま、八木晋、谷津栄光、矢野裕之、山田文一、松永和明、森田沙耶、吉田康弘

事務局: 長谷川知広、中田彩仁、中原加晴、吉武華子、池田真理子、高野太一、粟原奈津子、川上翔、林直美

連絡先: 認定NPO法人ビッグイシュー基金

〒162-0065

東京都新宿区住吉町 8-5 シンカイビル 201号室

T E L: 03-6380-5088

F A X: 03-6802-6074

H P: <http://www.bigissue.or.jp>

M A I L: tokyo@bigissue.or.jp